

29 熊本・鹿児島地区住民における動脈硬化性疾患に対する危険因子の長期追跡研究

研究代表者名：小川久雄¹

共同研究者名：副島弘文¹、河野宏明¹、丸林 徹²、合志秀一³、片山功夫⁴、入佐孝三⁴

施設名：熊本大学大学院循環器病態学¹、日本赤十字社熊本健康管理センター²、総合健診センター「コスモ」³、菊池養生園診療所・菊池広域保健センター⁴

急激なライフスタイルの欧米化と歴史的に類をみない急激な高齢化社会の到来という主として2つの要因で、動脈硬化性疾患の増加、重症化と若年化が叫ばれている。特に近年耐糖能障害者が増加しており、このことが動脈硬化性疾患をいっそう増加させている。欧米における動脈硬化性疾患発症に対する危険因子の大規模研究の報告はあるが、我が国での同様の研究に対する報告はほとんどない。我々が実施した日本人の急性心筋梗塞に対する危険因子の検討では、高血圧、喫煙、糖尿病が上位であり、欧米で上位を占めている高コレステロール血症は重要な危険因子ではなかった。欧米とわが国では危険因子が異なる可能性があり、我が国における危険因子を検討することは、日本人の動脈硬化性疾患予防の観点から重要であると考えられる。本研究では、動脈硬化危険因子のみならず運動習慣や食習慣など生活習慣まで調査を行い、そのデータを蓄積している。これらは通常の住民検診では得ることのできないデータであり、これら加わることで多くの解析が可能となった。今回は3,371人での解析を行いその内訳は男性1,121人(平均年齢 68 ± 11 歳)女性2,250人(平均年齢 65 ± 12 歳)であった。喫煙について記載が不十分な270人を除いて、喫煙の有無で冠危険因子について検討してみた。非喫煙者2,368人と過去喫煙者328人と現在喫煙者405人の検討では収縮期血圧(mmHg)は非喫煙者 131 ± 18 、過去喫煙者 130 ± 17 、現在喫煙者 135 ± 18 で他の2群に比し、現在喫煙者群において有意に高値であった($P < 0.001$)。同様に、拡張期血圧(mmHg)は非喫煙者 77 ± 10 、過去喫煙者 78 ± 10 、現在喫煙者 80 ± 11 で非喫煙者群に比し、現在喫煙者群において有意に高値であった($P < 0.001$)。総コレステロール(mg/dl)は非喫煙者 208 ± 35 、過去喫煙者 197 ± 34 、現在喫煙者 200 ± 35 で他の2群に比し、非喫煙者群において有意に高値であった($P < 0.001$)。中性脂肪(mg/dl)は非喫煙者 126 ± 82 、過去喫煙者 157 ± 102 、現在喫煙者 132 ± 81 で他の2群に比し、過去喫煙者群において有意に高値であった($P < 0.001$)。HDLコレステロール(mg/dl)は非喫煙者 61 ± 15 、過去喫煙者 54 ± 16 、現在喫煙者 58 ± 17 で非喫煙者群、現在喫煙者群、過去喫煙者群の順で低下しそれぞれに有意な差があった($P < 0.05$)。空腹時血糖(mg/dl)では非喫煙者 102 ± 29 、過去喫煙者 105 ± 32 、現在喫煙者 108 ± 35 で非喫煙者群に比し、現在喫煙者群において有意に高値であった($P < 0.005$)。

既往歴について検討してみると脳梗塞は無しが3,077人、治療中が31人、治療の既往が21人、未治療が2人であった。脳出血は無しが3,122人、治療中が10人、治療の既往が7人、未治療が0人であった。くも膜下出血は無しが3,116人、治療中が3人、治療の既往が10人、未治療が0人であった。同様に、高血圧は2,406人、616人、60人、48人であった。高脂血症は2,688人、237人、57人、143人であった。狭心症は3,077人、31人、21人、2人であった。心筋梗塞は2,963人、16人、4人、4人であった。糖尿病は2,946人、136人、26人、20人であった。痛風は3,077人、19人、29人、1人であった。心筋梗塞の既往は高血圧歴のない2,406人中11人で、高血圧歴のある724人中13人とやはり高血圧歴のある方が高頻度に心筋

